

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（文責／園長 石川照代）



附属幼稚園にも「いじめ防止対策基本方針」を備えました！

「いじめ」という言葉を耳にすると、ある種の緊張感を感じる人は少なくありません。親も教師も、どうか「いじめ」問題に遭遇しませんようにと思っています。それは、いじめられた子どもの壮絶な状況やいじめた子どものその後を思いやる時、どんなに辛くて苦しい日々を過ごすのであろうと想像できるからです。しかし、いじめは日常的に起こりうる極めて身近なものでもあるのです。

いじめ問題の専門家は言います。「いじめる子がいなければ、いじめられる子は決して生まれません。」その通りです。私たちにできることは、全ての子どもたちを、人の気持ちが変わり、人に辛い思いをさせない子どもに育てることです。もし辛い思いをさせてしまった時は、心から詫言、相手の心を癒やすことができる子にすることです。これができれば、いじめられて辛い思いをする子はいなくなるはずで、そして、このような思いやりや寛容の心は、実は幼児期に大きく育まれていくものだという事を、是非お知りおき下さい。

この度、「いじめ防止対策基本方針」を本園にも備えました。国の法律「いじめ防止対策基本法」（H25制定）は対象として幼児を想定していません。しかし、いじめ問題は人権問題です。どんなに小さな幼児であっても、生まれながらに「幸せに生きる権利」を持っています。これを守る責任が、関わる全ての大人にはあります。ですからこれは、「幼児がいじめたりするのか」というような議論の上にあるものではありません。私たち大人の責任を、形として表したものの一つだと言ってもよいでしょう。

この基本方針の整備は、幼稚園としては全国的にも例は少なく画期的なことです。大分大学も問題があれば迅速に対応できるよう「調査委員会規定」を制定しましたが、その中に、幼稚園も含んでいることを明文化して頂きました。また、全国国立大学附属学校PTA連合会は、保護者としての取組を「いじめ防止ガイドライン」として提案しています。（本日、お配りしましたので、目を通しておいて下さい。HPにもアップしています。）

「子どもは大人の映し鏡」といいます。私たち大人一人ひとりが、「人権」について絶えず深く学びながら、人の気持ちを思いやる姿を、子どもたちに見せていきたいものです。



段ボール積み木の巨大な造形物をめぐってのこと。自分の気持ちを言葉で伝えることができるようになってきた男の子が、「ねえ、ねえ、ねえ」と切り出し勇気を出して「ぼくも入れてほしいんだけど」と言った。にべもなく断られた。何度かお願いしてみても「ダメ」とびしやり。何故かジャンケンという手法に持ち込むが、相手がジャンケンを知らない。（チヨキがつくれぬ）そこへ、「ぼくも」ともう一人。3人での民主的な話し合いは年少さんにはかなり難しい。とうとう我慢の限界でちよいと手が出てしまった。しかし、相手もちよいとお返し。これはエキサイトするかな？と出どころを見計らっていると、意外にもそれ以上にはならなかった。男の子はまた必死に自分も作りたいと訴え続ける。側に別の子がきて、「大きな〇〇を作れば？」と助言を始めた。しかし3人には聞こえていない。とうとう巨大な造形物は、しだいに集まってきた子どもたちの群れの中で壊れてしまった・・・。

4月には皆無だった「話し合おう」とする姿。譲り譲られ折り合いがついた時、「自分も相手も気持ちいい（幸せ）」心地良さを知ることがとても大事。大人がぎりぎりのところまで見守ることによって、少しずつ自分たちの力でできるようになる。すぐに大人が出ていき、仲裁してはいる力がつかない。自分たちの力で生活を良くしていくという民主主義の「芽」は、こういった関わりの中で育つのだと思う。「ぎりぎり」を「見極める力」が保育（子育て）には必要である。



「ねえ、ぼくも入れてほしいんだけど」